

言語指導の基礎

(二)



——ことばの学習の系統——

村

石

昭

三

1 ことばの広がり

人は「暗い」ということばを聞けば、すぐ「夜」とか、「明かるい」とかいうことばを思いつく。「きょうはよい」と聞いただけで、「お天氣です」ということばをつづけることができる。このように、特定のことばは特定のことばと結びついており、とくに考えなくとも、無意識のうちに一系列のことばが結びついて現われる。これが通じあいの基礎になる言語習慣とよばれるものである。

幼児がことばを学習することは、このような言語習慣を獲得し、それを確かにしていくことである。言語習慣は、聞いたり話したりする通じあいの基礎になる、約束のようなものであるが、それができるためには、1、ことばの範囲が広がること、2、意味の理解が深まること、さらに3、ことばの抽象ができるという段階をとおらなければならぬ。

幼児は自分の生活に必要なもの、関係の深い事物のことばから習得していくが、そこには幼児らしい知覚の特徴が働いている。知覚しやすいものほど、幼児に注意され、その名前は覚えやすいもので

ある。幼児にとって知覚しやすいものは、

(4) 幼児の要求をみたす事物

(b) きわだつた知覚特性（たとえば、動く、鳴る）をもつ事物である。幼児が動物や乗り物のことばを早く覚えるのは、その物が動くので、きわだつて知覚されるのである。その上、鳴き声や音響がともなうので、いっそう覚えやすい。茶碗やおさじの類も早くからその用途を知る。これらのこととは幼児が初期に獲得する語いの種類を調べてみるとわかるところである。

だいたい、二才児が獲得することばは、飲食物、自分のからだ、動物に関することばである。三才児では、自然現象、人間、遊戯遊具、日用品などに関したことばである。四才児から五才児になると、社会的事項、固有名詞、抽象名詞がいちじるしく増していく。時間・空間に関することばの中で、半分以上の幼児がわかることばは三才児では、「遠い」「近い」「きのう」「あす」ということば、四才児では、曜日とか季節の名である。きょうは何月何日かということとは、六才にならないと過半数がわからない。

幼児の生活空間が広がるにつれて、語いも広がっていく。

2 意味の深まり

他の事物とどんな関係にあるか、さらに、そのことばは他のことばとどんな関係にあるかわかることである。ことばがわかつてから意味がわかつてくる。幼児期の段階で、意味がわかるというのは、ことばの示す事物が他の事物とどんな関係にあるかわかる、という段階までである。それも、おとなの場合とちがって、個人的経験と結びついたまで理解されているところに特徴がある。

幼児は事物にふれながら、実際に行動し、経験してみないことには考えられないものであって、これを幼児の動作的思考とよんでいふ。ことばを直接手がかりにしない、ことば以前の思考のしかた、理解のしかたである。

ことばの意味の理解を調べるときには、「○○ハドンナモノ?」¹⁾というように定義をさせることができるのであるが、四、五才の幼児は「いす」はするためのもの、「テーブル」はごはんをたべるとき使うものというように、「用途」によって定義する。定義はほとんど物の用途によっておこなわれる。これは四、五才ころからはじまり、小学校の低学年までつづく。

用途定義よりさらに進んだものは、物の属性によって定義することであるが、それはその後にでてくる傾向である。幼児には、「いす」はするためのものと考える方が、木でできていると属性をいふよりも定義しやすいものである。もともと、その用途定義も、自分がすわる特定のいすをさしてしたり、経験の報告であつたりする

ことばがわかるというのは、ことばの示す事物がわからることであり、意味がわかるというのは、その事物が自分にどんな役にたつか、

ことが多い。

「いす」の定義が自分がすわる特定のいすから離れて、一般的ないすの使用がわかつたり、いすの属性がわかつてるのは、意味が深まつた証拠である。

マリをころがして遊ぶ幼児は、「まり」はころがすものだとばかりはじめは考えている。そのうちに、まりが他の人は自分にたいするものとちがう関係で結ばれていることに気づく。まりはころがすものだとばかり思っていたのが、人はけつたり、投げたりしているのを見ると、もはや自分の遊びかただけでは意義づけられないことを知る。このようにして、「まり」の意味は分化し、深まつていく。より客観的になる。

また、「おかあさん」ということばは、幼児にはいつも自分の母親をさす。友だちのおかあさんのことは、「○○ちゃんのおばさん」という呼び方をする。そのうちに「おかあさん」は自分の母親だけではなく、友だちの母親でも「おかあさん」とわかつてくる。つまり、同類の事物を総称することばとして覚えてくる。これは個々の対象の間に共通した特性をぬきとつて、客観的な一般的特性だけで一つの意味をつくることである。

このように、意味の分化と総合によって、意味が深まり、ことばの抽象が生まれる。

3 ことばの抽象

ことばの抽象とは、ことばが具体的な事物や個人の経験から離れて一般的な概念になり、ことばは相互の関係を頭の中ですじみちたてて理解することである。

四才児は一対の手袋について、片方はもう一方と同じに上等だといわれるが、どちらが片方で、どちらがもう一方かということをしきりに聞きたがる。ことばの抽象は五才児あたりでそろそろできるようになるのであって、四才児にはその程度抽象化されたことばでもむずかしい。「クレヨン」「鉛筆」ということばを「勉強道具」ということばでまとめたり、「人参」「大根」を「野菜」ということばでまとめることもむずかしいが、「鳥」「果物」「けだもの」の中にどんなことばが入るかは早くからわかる。このように、包むことばと包まれることばとが完全に結びつくのは、実に小学校も中学生の時期である。

また、対のことばや、反対のことばがある。「行く」と「行かな」「い」、「たべる」と「たべない」などの関係は幼児にたいするおとの容認拒否、幼児自身の成功・失敗の生活経験から、幼児期でも早めに理解されるが、「白」と「黒」という質的に反対のことばの関係を理解することはむずかしい。ある調査で、六つのことばをだして、はじめに思いついたことばを言わせている。それによると、

おとなは「テーブル」にたいして「イス」、「暗い」にたいして「明かるい」ということはを連想するのに、幼児は「テーブル」にたいして「たべる」「暗い」にたいして「夜」ということばを連想している。このことは幼児の言語習慣がきわめて具体的であり、ことばの抽象の低さを示すものである。

しかしともかく、低い段階でのことばの抽象は幼稚園を終るころにはできつたある。ことばの抽象ができるることによって、ことばで考えることができ、思考力を促進させる結果になる。乳児期の單に模倣にたよることが多かつたことばの学習は自発的になり、創造的学習ができるてくる。

ことばの学習と関連して、幼児の質問ということについて触れておこう。幼児が自発的にことばの学習をする具体的な姿は、質問といふ形であらわれる。

幼児期全体をさして質問期とよぶことが多いが、それもはじめは、それが何であるか、その事物の名前は何というかの「なに」が多く、つぎに人の名前を聞く「だれ」の問が多くなる。ついで、日常のことがらの因果関係や、人の行動の理由について、「なぜ」の問をするようになる。もっとも、四才児あたりまでは、必ずしもその答に興味をもつていいわけではない。相手が説明してくれる答が自分の考えていたことにうまく一致していることを確かめて喜ぶも

のである。ことば遊びのための質問というか、ひとりごとというか、その程度のものであるが、質問によって、幼児は自分の考えに照らしあわせて、だんだんとことばの学習を試みているのである。もちろん、幼児は首尾一貫した、すじみちだてた思考をすることはできないから、具体的な経験や空想にことばを結びつけていく程度である。

五才児になると、幼児の方から積極的に聞く質問の回数は少なくなるが、そのかわり、より適切になり、ことばの質問がふえてくる。知りたいから聞くという求知的な「なぜ」が多くなり、單に人と交渉したいから質問するとか、質問のための質問という傾向は少なくなってくる。「これはなんのためにあるのか」「これは、どうして動くのか」というようなまじめな質問をして、考え方をみあげていく。抽象的なことばの質問をして母親や教師たちに説明を困らせるのもこのころである。

このような幼児の心の成長を知つて、幼児の質問にたいして、どのように答えてやれば、幼児の考える力をのばし、ことばの学習を効果的に行なうことができるか、熱心に考えてあげたいものである。

(国立国語研究所)

* * *